

## 学位請求論文審査報告書

氏 名 秦 野 貴 生

論文題目 ダルマキールティの言語理論

審査委員 主査 大谷大学教授

山 本 和 彦

Ph.D. [University of Poona]

博士（文学） [大谷大学]

副査 大谷大学教授

福 田 洋 一

副査 京都産業大学教授

志 賀 浄 邦

博士（文学） [京都大学]

### I 論文内容の要旨

7世紀頃にインドで活躍した仏教論理学者ダルマキールティ（法称）は、6世紀頃のディグナーガ（陳那）の認識論・論理学・言語論を継承しつつ、言語は「他の排除」を意味対象としているという独特の理論を構築した。一般に「アポーハ論」と呼ばれる言語理論である。この理論は彼の最初の著作であり、主著でもある『プラマーナ・ヴァールティッカ』（知識論評釈）第1章「自己のための推理論」全340偈のうち、第40偈から第185偈までの計146偈を占める重要な議論であり、存在論（実在と認識内容との間にある因果関係）、認識論（認識対象を捉えるための認識のはたらき）、言語論（言語活動において用いられる言語表現全般）が複雑に絡み合い構築されている。本論文では『プラマーナ・ヴァールティッカ』に基づき、ダルマキールティの言語論が考察されている。

論文の目次は以下の通りである。

### 略号表と参考文献

#### 序論

- 1 本論文の背景
- 2 研究史及び問題の所在
- 3 本論文のテーマ及び位置付け
- 4 本論の概観
- 5 使用テキストについて

#### 本論

- 第1章 チベット人注釈から見るアポーハ論構造

- 第1節 はじめに
  - 第2節 アポーハ論の科段概観
  - 第3節 議論の分け方の比較
  - 第4節 科段名から見る議論展開
  - 第5節 おわりに
- 第2章 ダルマキールティのアポーハ論の言語論的、認識論的、存在論的構造
- 第1節 はじめに
  - 第2節 集約的に説かれている用例
  - 第3節 要約からのまとめ
  - 第4節 普遍と同一基体性の関係
  - 第5節 おわりに
- 第3章 pratikṣepa 及び ākṣepa の考察
- 第1節 はじめに
  - 第2節 pratikṣepa の用例
  - 第3節 ākṣepa の用例
  - 第4節 おわりに
- 第4章 adhyavasāya の位置付け
- 第1節 はじめに
  - 第2節 adhyavasāya の訳語について
  - 第3節 adhyavasāya に関する先行研究
  - 第4節 自注における adhyavasāya の用例
  - 第5節 おわりに
- 第5章 ekīkaraṇa と ekapratyavamarśa の比較
- 第1節 はじめに
  - 第2節 ekīkaraṇa の用例
  - 第3節 ekapratyavamarśa の用例
  - 第4節 おわりに
- 第6章 共相の考察
- 第1節 はじめに
  - 第2節 語句の使用頻度
  - 第3節 自注以外での共相の用例
  - 第4節 自注での共相の用例

## 第5節 おわりに

### 結論

さらに、資料として「シャーキャブッディ注および対応するカルナカゴーミンのサンスクリット原文の対照テキスト」が付されている。

本論第1章では6人のチベット人注釈家、ウユクパ（'U yug pa）、タルマリンチェン（Dar ma rin chen）、ゲンドゥントゥプ（dGe 'dun grub）、ケートゥプジェ（mKhas grub rje）、コラムパ（Go rams pa）、シャーキャチョクデン（Shakya mchog ldan）の科段に基づいて、『プラマーナ・ヴァールティッカ』全146偈の議論の流れが明確にされている。彼ら6人のうち、ウユクパ、タルマリンチェン、ゲンドゥントゥプの3人の科段は全体としては内容が共通していた。彼ら3人のうち、特にゲルク派僧院で高く評価されているタルマリンチェンの科段名を参照することにより、いずれの偈においてどのような議論が行われているのかということについての概観が提示されている。また、ダルマキールティが自説や自説の要約を述べている箇所が推測されている。

第2章の前半では、第1章で得られた内容にも依りながら、言語論、認識論、存在論について集約的に説かれている用例が検討され、これら三つの理論がどのように関係しているのかが明確にされている。第2章後半では、「言語・概念の普遍性」（sāmānya）と「単一なる個物の複数属性への分節化」（sāmānādhikarāṇya）とが関連して述べられている用例が検討され、同章前半でまとめた三つの理論の関係がより深く考察されている。言語表現（vyavahāra）に関するこれら二つの用語は、言語活動における中心的な役割を担っているが、いずれも実在に基づくものではない。そして、一つの差異が複数のものに共通しているという関係である「言語・概念の普遍性」と、一つのものが複数の差異を持っているという関係である「単一なる個物の複数属性への分節化」とはきれいな対比関係にある。知の中に現れている諸対象の間の関係や、それらに対する表現の仕方によりこれらの言語表現の相違は生まれる。また、分別知（vikalpa）上の現れ（pratibhāsa）を外界実在と思い込むことによって言語行為者たちは言語活動を行うが、分別知中の対象と外界実在に習気（vāsanā）を介した間接的因果関係がある場合、外界実在に対する整合性（avisamvāda）が成立し、因果関係がない場合には、整合性もなく誤った認識になる。

第3章では、言語表現の一つ「属性・基体」（dharma/dharmin）の議論の中で用いられる「断じること」（pratikṣepa）と「含意」（ākṣepa）の用例について検討されている。言語表現である属性と基体に関し、属性と基体とが同じ対象を表示するという点では、両者は異なるものではないが、異なるはたらきをもつという点では同一ではない。「断じること」の用例では、「属性を表示する語は他の差異（bhedāntara）を断じ、基体を表示する語は他の差異を断じない」と説かれ、一方、「含意」の用例では、「基体を表示する語は他の差異を含意し、属性を表示する語は

他の差異を含意しない」と説かれる。「含意」は、属性と基体の区別の前段階にあたる名称が付与される議論においても用いられていたが、その主な意味内容としては「含意」が「断じること」の否定と一致し、「含意」の否定が「断じること」と一致すると言える。

第4章では「思い込み」(adhyavasāya)という概念知の機能について検討されている。「思い込み」の解釈は各先行研究において様々であったが、「思い込み」が整合性の有無に関わるかどうか、という点において見解は大きく分かれている。検討を行った用例の大部分が「知における現れを外界対象であると思いつく」という内容が示されたものであり、それ以外の用例では「効果のないもの・効果のあるもの」という語で言い換えられていたが、意義の違いはないと考えられる。そして、全ての自注の用例において上記以外の用法をもつような例外は見られない。「思い込み」は、仏教徒が認めていない「根本原質」(pradhāna)などの存在に対しても使用されることから、いかなる存在に対しても用いられることがわかり、人間の言語表現一般、分別知における普遍的な働きであることがわかる。

第5章では「同一化」(ekikarāṇa)と「同一判断」(ekapratyavamarśa)という両語が、第4章で考察した「思い込み」との関連から比較されている。「同一化」は、「知覚されるもの」と「分別されているもの」を同一のものとする働きであるが、その二つの項はそれぞれ「外界対象」と「分別知上の現れ」に対応している。また、同一化には「効果的作用のないものを効果的作用のあるものとする」という関係も見られることから、同一化の働きと思い込みの働きは同じものであり、いずれも分別知上の現れから外界の対象に向かうものであった。一方で「同一判断」は、相互に異なった外界の対象を、その効果的作用の同一性にに基づき、無区別に捉える働きであり、第2章で検討した「言語・概念の普遍性」を基礎付けるものである。このように「同一化」「同一判断」とでは同一とする対象が異なっており、自注において両語が同じ文脈で用いられることがないことから、異なった概念であることが分かる。

第6章では、『プラマーナ・ヴァールツェティカ』で用いられる「認識対象としての普遍的存在」(sāmānyalakṣaṇa)と、第2章後半で考察された「言語・概念の普遍性」(sāmānya)の比較を通し、その違いについて検討されている。「言語・概念の普遍性」はダルマキールティにとって実在ではないが、ミーマーンサー学派などの他学派には実在と認められる。自注において「言語・概念の普遍性」は言語表現の一つと位置付けられていた。一方、「認識対象としての普遍的存在」は認識対象の一つである。「認識対象としての普遍的存在」の用例に関し、自注では分別知において現れる普遍的な形象として説かれており、この普遍的な形象を外界対象であると思いつくことによって、言語活動が行われる。自注以外の用例では、「認識対象としての普遍的存在」は仏教が認めるもう一方の認識対象である自相(svalakṣaṇa)との違いによって規定されていた。しかし、その「認識対象としての普遍的存在」についての規定の多くは、分別知において現れる

形象に該当するものと考えられる。

## II 論文審査結果の要旨

本論文は『プラマーナ・ヴァールティッカ』に基づく、ダルマキールティの言語論の考察である。方法は、テキストで用いられるさまざまな用語の用例の考察である。目的は、彼の言語論を明らかにすることであり、最終的にはダルマキールティの思想の解明である。

審査委員からは以下のような指摘があった。

### ①思想的な深さ

本論文の各章には、まとめとしての小結が述べられている。しかし、それらはテキスト全体を読み込んで導き出された深い考察の結果とは言い難い。もっと思想的に踏み込んだ結論が欲しかった。テキスト全体を正確に解読してのみ、個々の用例の意図や意義が解明されてくる。すべての仏典に言えることであるが、ブツダから脈々と流れている仏教思想を意識しながら、仏教のテキストは解読されるべきである。

### ②用例研究の有効性と困難さ

用例研究は、テキスト解読のために有効な手段となるが、困難さもある。ダルマキールティ自身の用語を取り上げてその用例を考察したことは評価できる。しかし、本論文で取り上げた『プラマーナ・ヴァールティッカ』だけではなく、『プラマーナ・ヴィニシュツチャヤ』（知識論決択）など他のダルマキールティの著作すべてについての考察も必要であったが、本論文ではそれができていなかった。

### ③他宗教の思想に対する文献を通しての解明

ダルマキールティの論争相手であるミーマーンサー学派やニヤーヤ学派などのヒンドゥー教のテキストを参照することも必要であるが、本論文ではそれができていなかった。今後の研究課題となるだろう。仏教を専門とする研究者が、ヴェーダやウパニシャッドを聖典とするヒンドゥー教のテキストを正確に読むことは非常に困難なことである。しかし、ダルマキールティの議論の前提を知っておくことは、彼の著作を読み込む大前提であり、それなしにはヒンドゥー教と論争している仏教の思想を正確に理解することは不可能である。

### ④チベット人註釈家に対する注目

インドのテキストを解明するには、従来であればインド人の註釈を参照するのが常であった。しかし、本論文ではチベット人の註釈が、科段だけではあるが参照されていることは評価できる。さらに将来的な課題でもあるが、タルマリチェンなど思想的に優れたチベット人註釈家の註釈を読み込むことができれば非常に独創的な研究となる。

### ⑤ダルマキールティと註釈者との区別

従来のこの分野の研究では、ダルマキールティと註釈者の思想の切り離しが十分とは言えなかったが、本論文ではダルマキールティ自身の思想は何なのかという意識が最後まで貫かれていることは評価できる。

#### ⑥資料

本論文の資料ではシャーキャーブッディの註釈のテキストが校訂されているが、それに対する和訳研究を、学界に対する貢献という意味でも、近い将来に行った方がよい。

#### ⑦総括

チベット人註釈者の註釈を用いることやダルマキールティ自身の用語を探るなど研究の方向性は間違っておらず、本論文が秘めている可能性も伝わってくる。研究方法の精度を高めて、テキスト全体を通してこの研究スタイルをもっと突き詰めていけば、本論文を出発点として、さらに思想的に深い研究成果が期待できる。仏教とヒンドゥー教との関わりについても、文献を踏まえた研究が期待される。

以上の点を踏まえて、本論文には学術的価値があると考えられる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2020 年 1 月 31 日に試問を行った。その結果、審査員一同一致して、秦野貴生に大谷大学博士（文学）の学位を授与する事が適当と判断した。